
画中の少女

香柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

画中の少女

【Nコード】

N7882Z

【作者名】

香柳

【あらすじ】

継母のいじめに耐えかねて、夏凜^{かりん}は亡き父の書庫へと逃げ込んだ。そこには不思議な絵画があつて……。

夏凜^{かりん}は逃げに逃げて、いつのまにか奥庭の書庫の近くへとやってきていた。そこには彼女の亡き父が収集した、古今の名画名筆がおさめられている。

「夏凜！ このごくつぶしっ！ いったいどこへ隠れたのよ?!」
回廊の向こうから追いかけてくるのは、怒り狂った継母の声。
今もし捕まったら、ひどい折檻をうけるに決まっている。継母は今度は何をするだろう。鞭で叩く？ それとも焼けた火箸を押しつけられる？

(……このままじゃ、私はもたないかもしれない。限界だわ)
夏凜は両手で顔を覆った。いつそ死んでしまったほうが、楽かもしれない。

早朝から起き出して朝食をつくり、何も食べずに昼過ぎまで洗濯と掃除をして、その後やっと残飯みたいなものを少し口に入れて、また夜遅くまで働かされて。夏凜は疲れきっていた。

そうして繕い物の最中、少し居眠りしてしまったのを見とがめられて、継母に追いかけまわされていたのだった。

これまでの仕打ちを思い出してぞっとなった夏凜は、あわてて目の前の書庫の鍵を開け、中に隠れた。

夏凜は亡き父と同じく、芸術を好むたちである。よって生前の父は彼女に、この離れの書庫の合い鍵を渡してくれていた。父の死後、継母のいじめに耐えかねた時などに、夏凜はよくここへこもって、画や書をながめては自分を慰めていたのだった。

「ふん。夏凜、ここへ隠れたのは分かってるんだ。おまえは生まれついてのお嬢様だから、ごたいそうな芸術を理解できるんだったね。私のような卑しい娼妓あがりの女とは違うんだよねえ。……そんなに芸術が好きでこの継母が嫌いだというなら、いつそそこに一生とじこもっているがいいさ!」

書庫の中でふるえる彼女に、戸の外から意地悪な声が響いてくる。継母は何をするつもりか、といぶかしんでいると。

しばらくして、戸の外から釘を打つ音が響いてきた。どうやらこの書庫の中へ、夏凜を閉じこめるつもりらしい。

「ーや、やめてお義母さまっ！ 許してください！」

「今さら遅いよ、夏凜。おまえのような怠け者の馬鹿娘は、この書庫で骨董品とともにカビでもはやしてればいいのさ！」

どんなに泣き叫んでも、継母は許してはくれず……夏凜は書庫の中に一人、閉じこめられてしまった。

（どうしよう。私はこのままでは死んでしまう）

「……ねえ、あんた、この書庫から出たいんでしょ？ だったら、あたしと取引しない？」

ふいにかすれた女の声がして、夏凜はびくりと震えた。ついに幻聴が聞こえはじめたのだろうか。それともこの倉庫に、化け物が棲みついているのか？

「ちよつと、脅えてばかりじゃ話にならないでしょ。ここよ、ここ。巻かれた掛け軸に、あたしはいるの」

夏凜がこわごわ見やると、書机のそばの大きな壺に、巻かれた掛け軸が何本か入っている。女の声はそのうちの一卷から、響いてきているのだった。

「あんたはこのままじゃ、ここで飢え死にしちまう。だったらあたしと取引して、助かりたいと思わない？ ……あんたは意気地なしで、いつもここで泣いてばかりだったね。いつも見てたよ。ねえ、今こそ勇気を出して、運命に立ち向かってみたらどうだい？」

その言葉に、夏凜はどきりとした。たしかにその通りだ。自分は17歳になるこれまで、泣くか脅えるか従うかしか、してこなかった。もう大人になろうという年齢なのに、これではいけない。

（これが化け物だとしても、だから何だっていうの。お義母さまはどうせ私を殺すつもりだわ。だったらここで化け物にとり殺されても同じこと。もしかしたら本当に、取引で助かるかもしれない）

夏凜は女の声の導くまま、掛け軸を手にとり、さらりと紐をほどいた。書机に広がった掛け軸は、みごとな風景画だった。

「見える？ あたしは建物の中なの」

山間の瀟洒な宮殿の中に、一人の女の姿が描かれている。どうやらこれが、声の主らしい。他に人物はおらず、獣さえ描かれていなかった。

「あなたは、ずいぶん……寂しいところにいるのね」

夏凜が声をかけると、宮殿の最上階の窓辺にいる女は、こっくりとうなずいた。

「そう、だからここを出たいのよ。昔、悪い奴にここへ閉じこめられちまってねえ。脱出するには、心も体も清らかな乙女の手助けがいるってわけ。……年のため聞くけど、あんた処女よね？ でないと取引しても無駄だから」

「あ、当たり前でしょう！ 私はこの屋敷から、一步も出たことないんだし」

真っ赤になって呟く夏凜に、女はからからと笑った。

「ああ、よかったよかった。じゃあ、こうしよう。あんたがあたしを助けてくれたら、あたしはこの倉庫を突き破って、意地悪な継母に仕返ししてやるよ。これでどう？」

「……助けるって、あなたをここから出してあげるってことでしょ？ いったいどうすればいいの？」

「この掛け軸は、いわば牢獄みたいなもんだからね。保証人が署名してくれば、あたしは出ることができる。この画の題字のところに、空白があるだろう？ そこにあんたの名前を記入してくれればいいのさ」

「ああ、そんなことでもいいのね」

夏凜はほっとした。急いで書机の墨をすり、筆の先をしめらせる。名前を記そうとして、一瞬、不安がかすめた。

「ねえ、あなたはさっき、私のお義母さんに仕返しするって言うってたけど。たしかにあの人はひどい人だけど、ひどいことはしないで

ね。小さい頃から苦労してきた、可哀想な人なんだし」

女の声が、呆れたように返ってくる。

「まったく、お人好しな娘だねえ。いらいらする。――分かったよ、ほどほどに仕置きするでしょう」

夏凜は慎重に名前を記した。

するとほどなく、掛け軸から淡い光が漏れだして、やがてその光が書庫の内を満たすようになった。

「――あはは、ようやっと娑婆へ帰れる！　ありがとうよ、お嬢ちゃん！　約束通り、倉庫は壊して継母をとっちめとくからね！」

愉快そうな女の声がとどろき……あまりにも光がまぶしく、夏凜が目をつぶった、一瞬。

とてつもない衝撃が体中を襲い、夏凜は昏倒した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7882z/>

画中の少女

2011年12月25日12時50分発行